

厚生労働省による「援護行政」について

先の大戦が終わってから2025年(令和7年)で80年が経ちますが、厚生労働省では、戦没者の慰霊や、戦没者遺族等への支援とともに、記憶の継承の取り組みを進めています。

慰霊事業



▲全国戦没者追悼式(2024年(令和6年)8月)

先の大戦で亡くなられた方を追悼し、平和への誓いを新たにする「慰霊事業」を実施しています。

毎年8月15日には、東京の日本武道館で天皇皇后両陛下のご臨席の下で「全国戦没者追悼式」が行われます。

また、ご遺族の希望に応じて国内外の戦地を訪れ、祈りを捧げる慰霊巡拝を実施しています。

遺骨収集



▲パラオ共和国ペリリュウ島の集団埋葬地での遺骨収集

海外の戦没者約240万人のうち、約112万人の方のご遺骨がまだ収容されていません。

国の責務として、一日も早く、一柱でも多くのご遺骨をご家族のもとへお返しできるよう、遺骨収集に取り組んでいます。

戦没者遺族等への援護

戦争で心や体に障害を負った方や、大切な家族を失ったご遺族の生活を支えるための「援護」も行っています。

具体的には、障害の状態に応じた障害年金や、ご遺族への遺族年金などを支給しています。

戦没者の妻など、ご家族の特別な心の痛みを慰めるための特別給付金や、弔慰金も支給しています。

また、戦争によって中国に残され、言葉の壁や生活習慣の違いに苦しみながら帰国された「中国残留邦人」の方々への支援も実施しています。



記憶の継承

これらの戦争の記憶と平和の尊さを未来へつなぐ「記憶の継承」にも力を入れています。

東京の九段下には、戦争中から戦後の国民の暮らしや労苦を伝える「昭和館」と、戦争で傷ついた兵士とその家族の苦難に焦点を当てた「しょうけい館」という二つの国立施設があります。

また各地域での記憶の継承に取り組む「平和の語り部事業」を支援しています。

(昭和館)



(しょうけい館)



戦後80年 記憶の継承シンポジウム

過去を知り、現在そして未来に生かす

日時 令和7年8月3日(日) 10時～12時

場所 東京都千代田区 九段会館テラス3階 真珠の間

戦後80年を迎え、戦争を体験された方が少なくなる中、国民が戦争の記憶を共有・継承し、その学びを現在、そして未来に生かしていくことが重要です。そこで、本シンポジウムは、過去・現在・未来のつながりを意識しながら、先の大戦に関する世代を越えた 効果的な記憶継承のあり方について議論いただき、多様な主体が記憶継承のあり方について考え、実践する機運を醸成するとともに、今後の施策・活動に反映することを目的としています。

プログラム

前半 シンポジストによる発表

後半 パネルディスカッション

登壇者

座長

戸部 良一氏

(防衛大学校名誉教授)



▶経歴

1948年 仙台市生まれ
1976年 京都大学大学院博士課程単位取得退学
防衛大学校講師、のち同助教授
1990年 同教授
2009年 国際日本文化研究センター教授
2014年 帝京大学教授
2019年 同定年退職

▶コメント

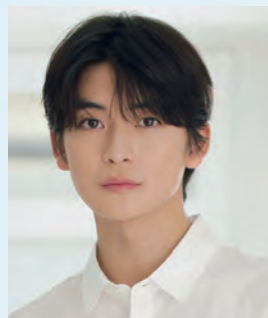
私は、子供のころ、先の大戦を直接体験した父や母を含む大人たちから、戦争の話を聞くことができました。しかし、今の子供たちには、そういう機会はほとんどありません。多くの場合、戦争の記憶は、直接体験のない世代からその次の世代へ、さらにその次の世代へと伝えて行かなければなりません。そこにはおそらく多くの、そして様々な難しさがあることでしょう。

今日のシンポジウムでは、戦争の記憶の継承を実践している方々から、そうした難しさ、難しさを乗り越えるための工夫と試み、乗り越えたときのやりがい、といったものを伺いたと思います。また、こうした戦争の記憶の継承という問題を、若い世代がどのように感じ取っているのかも考えてみたいと思います。

ゲスト

高橋 文哉氏

(連続テレビ小説「あんぱん」
辛島 健太郎 役)



▶経歴

2019 年 仮面ライダーゼロワンで俳優デビュー。以降、さまざまなドラマ・映画に出演し、
2024 年 第 47 回「日本アカデミー賞」新人俳優賞受賞、
2025 年 第 49 回エランドール賞受賞。

▶コメント

連続テレビ小説「あんぱん」への出演(辛島健太郎役)がきっかけで今回のお話をいただきました。

記憶の継承という言葉に責任を感じ、このシンポジウムへの参加を大変光栄に思います。

普段は、お芝居を通して皆様に少しでも心動くきっかけをお届けできたら、また、たとえば今回の「あんぱん」のような作品を通して、記憶の継承に少しでも役に立てたらという気持ちで活動していますが、シンポジストの皆様のお話を聞いて自分が何を感じ何を継承していきたいと思うのか、自分自身も楽しく楽しみにしています。

僕にできることは戦争という出来事を決して忘れてはならないということだと思っています。

全てを知ることにはできませんが、お話を聞いて次の世代に繋いでいくことに責任を持ち参加したいと思います。

シンポジスト

大東 潤氏

(日本遺族会 平和の語り部アドバイザー)



▶経歴

2010年 照明機器メーカー 勤務 工業デザイナー
2011年 平和学習講師を開始
2015年 農業機器メーカー 勤務
2016年 野畑工房 設立 同代表(デザイン・動画制作)
2016年 兵庫県遺族会青年部 設立 同副部長 就任
2024年 日本遺族会 平和の語り部アドバイザー 就任

▶コメント

日本遺族会の『平和の語り部アドバイザー』として、遺児の方々にご協力いただきながら学校現場で実施している平和学習に関する講話や、その相談の任を担っています。

『戦争＝白黒の時代』と、多くの方が戦争とは縁遠く、語り部の担い手も高齢化と共に減少し、学校の先生も戦争を直接知らない時代となりました。

平和学習では、学生の皆さんに祖父母『自分たちの家族』のことを学び考え、戦時下における『自分たちの地域を学習する』といった、自分事として、地域学習の一環として、戦争について学べる機会を目指し取り組んでいます。

自身も地元慰霊祭に参列し、パプアニューギニアで戦没した曾祖父のことを調べたのが始まりとなります。終戦80年やお盆も間近となりますが、今回のシンポジウムが、皆さんのご家族や戦争について思いを馳せるきっかけとなれば幸いです。

加藤 つむぎ氏

(帰還者たちの記憶ミュージアム(平和祈念展示資料館)学芸マネージャー)



▶経歴

2000年 京都造形芸術大学(現・京都芸術大学)大学院修士課程芸術学専攻修了
2003年 JICA青年海外協力隊隊員としてエル・サルバドルへ赴任
2006年 筑波大学人間総合科学研究科研究員
2010年 帰還者たちの記憶ミュージアム(平和祈念展示資料館)学芸員

▶コメント

帰還者たちの記憶ミュージアムはこれまで、戦争体験者の語りによる継承に重点を置いた活動を行ってきました。語り部たちは「自分と同じ苦しみを、次の世代には二度と味わってほしくない」という思いで、つらい体験を語ってくれました。戦後80年を迎えた今、体験者の声を聞ける時間は残りわずかとなり、先の大戦のリアリティが薄れつつあると感じます。

若い来館者の方から「戦争の展示は、怖くて見ていると気分が落ち込む。なぜそんな思いをしてまで過去の戦争を学ばなければならないのか？」と尋ねられたことがありました。この質問に、私たちはどう答えるべきでしょうか。本シンポジウムが、みなさんと一緒に考える機会となることを願っています。

平本 真子氏

(ひみつ基地ミュージアム(錦町立人吉海軍航空基地資料館)副館長)



▶経歴

1999年～広告代理店及びデザイン事務所勤務
2007年 COCO design 起業
2016年 錦町地域おこし協力隊就任
2018年 錦町立人吉海軍航空基地資料館(山の中の海軍の町 にしき ひみつ基地ミュージアム)副館長として活動
地域おこし協力隊3年の満期終了後、錦町非常勤職員として採用
2020年 一般社団法人 錦まち観光協会入社 現在に至る

▶コメント

戦後80年を迎える年に、このような機会をいただいたことを大変光栄に思っております。自身の勤務の中で、先の大戦の体験や歴史から現在を学び、それらを未来に伝えていくことの大切さを日々感じています。今、過去とのつながりを忘れてしまえば、あの大战の歴史は教科書の中の出来事や博物館に並ぶ展示物などになってしまうのではないのでしょうか。ですが、今ならば「自分の家族の体験」として未来の世代へ繋ぐことができます。私たちのように地域に残る戦争遺跡やその歴史を紹介する資料館は、その歴史と記憶を未来へ繋ぐ場として、幅広い年代、たくさんの方に訪れていただくことが、これからの重要なテーマの一つとなるのではないのでしょうか。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

黒沢 文貴氏

(東京女子大学名誉教授)



▶経歴

1976年 上智大学文学部史学科卒業
1984年 上智大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学
1992年 宮内庁書陵部編修課主任研究官
1995年 東京女子大学現代文化学部助教授
1998年 博士(法学、慶應義塾大学)
2009年 東京女子大学現代教養学部教授
現在、東京女子大学名誉教授

▶コメント

戦後80年となり、「戦争体験者なき戦後」になろうとしています。戦後の日本人が直接に新たな戦争を経験しなかったことは幸いでした。ですから、現在我々が身近に思い浮かべる戦争は「先の大戦」です。他方、世界では第二次世界大戦後も、戦争・紛争が絶えません。現在も、進行形の戦争・紛争があります。

このギャップの中で、我われ現代に生きる日本人にとっての戦争と平和について考えたいと思います。その際、私自身は歴史研究者ですので、その立場から、とくに戦争の歴史の継承がいかにしたら可能なのか、何を継承すべきなのかを、みなさんとともに探っていきたいと思います。

松本 穂高氏

(広島市教育委員会指導主事)



▶経歴

2007年～ 広島市立小学校 教諭
2022年～ 広島市教育委員会学校教育部指導第一課 指導主事

▶コメント

人類史上初の被爆都市である広島市は、「こんな思いを他の誰にもさせてはならない」という被爆者の平和への願いを原点に、世界恒久平和の実現に向けた取組を進めており、教育委員会では、被爆の実相を「継承」とすること、被爆の実相や平和についての自らの考えを「発信」することを主軸とした平和教育を推進しています。

被爆から80年が経過し、被爆体験や戦争体験の風化が危惧される中、世界恒久平和の実現に向けた取組の重要性と、それを推進していくことの必要性は、従来にも増して大きくなっています。本日は、継承を図る様々な取組について意見を交流し、更なる平和教育の充実に向け、学びを深めていきたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。